

青年期の自我発達上の危機状態尺度 に関する内容的妥当性の検討

長 尾 博

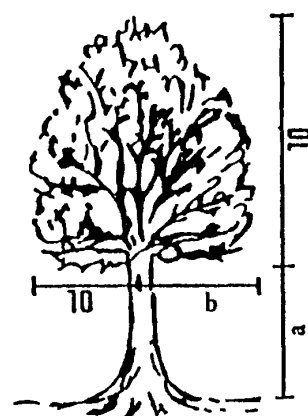
A Study on the Content Validity of the Ego Developmental Crisis State Scale during Adolescence

問 題

本研究は、青年期の自我発達上の危機状態尺度の内容的妥当性に関して中学生に対しバウム・テストと Olson, D. H. ら (1985) の作成した FACES-Ⅲ (family adaptation and cohesion scale the third) を用いて検討を行うものである。

長尾 (1989) は、青年期の自我発達上の危機状態を定義し、その質問紙尺度を作成した。この尺度の併存的妥当性については、長尾 (1992) による研究から登校拒否や緘黙などの非社会的行動を示す青年に対しては十分であったが、暴力、暴走、窃盗などの反社会的行動を示す青年に対しては併存的妥当性がないことが明らかにされた。そこで今回、この尺度とバウム・テストと FACES-Ⅲ を実施することによって、この尺度の内容的妥当性を検討してみることにした。対象は、青年期のなかでもっとも心身の発達が著しい中学生に絞った。

バウム・テストの評定の方法はさまざまあるが、Koch, K. (1949) が樹冠に対する幹の高さの比率を重要な発達指標としてあげ、この比率が高い者ほど精神発達遅滞や神経症などによる退行状態がとらえられると指摘している。このことを山下 (1982) が小学生から中学生までを対象とした研究結果で検証していることから、本研究では Fig 1 に示す a 値と b 値を自我発達の評定指標とした。また、これまでの描画テストの研究では描画の各部分の構成要素を分割し、その特徴を統計的に分析する傾向が強く、描画の全体的な特徴が軽視されてきたきらいがあることから、そのバウム・テスト結果を見て力強いイメージ、あるいは弱々しいイメージを感受するかという全体的な印象も評定指標とした。



$$a = \frac{\text{幹の高さ (mm)}}{\text{樹冠の高さ (mm)}} \times 10$$

$$b = \frac{\text{右の幅 (mm)}}{\text{左の幅 (mm)}} \times 10$$

Fig 1 a 値と b 値

ところで中学生の自我発達、その家族の関係のあり方と関連していることは日々の臨床経験からとらえられる。Scott, W. A. & Scott, R. (1991) の中学・高校生を対象とした研究から青年の不安の程度や「自尊感情」(self esteem) の程度は、その「家族の調和」(familial harmony) と関連をもつことが明らかにされている。また、Malmquist, C. P. (1965) の研究から「登校拒否」(school refusal) の子どもをもつ家族は、家族機能に問題があることが指摘され、とくに Bernstein, G. A. ら (1990) の研究では「役割遂行度」(role performance) や「価値や規準」(value and norms) が強いことが明らかにされている。また、Reinherz, H. Z. ら (1989) による FACES-III を用いた研究では中学生の抑うつ程度と家族の「凝集性」(cohesion) の程度とは負の相関があることが指摘されている。そこで中学生の自我発達上の危機状態と家族関係のあり方との関連性を明らかにし、青年期の自我発達上の危機状態尺度の内容的妥当性を検討してみることにした。

家族関係をとらえる質問紙法のなかで Olson, D. H. ら (1985) の作成した FACES-III がある。この尺度は、家族の関係を「凝集性」(cohesion)、つまり家族のまとまりの程度と「適応性」(adaptation、changeともいう)、つまり家族の問題対処能力の柔軟さの程度の2軸からとらえ、Fig 2 に示すようにそれぞれが適切な水準であれば精神的に健康な家族であると評定するものである。わが国では貞木・榎野・岡田 (1992) の研究からこの尺度が臨床現場で適用できることが指摘されているものの、まだ標準化されてはいない。本研究では Olson, D. H. ら (1985) の作成した FACES-III を筆者が翻訳したものを適用してみることにした。

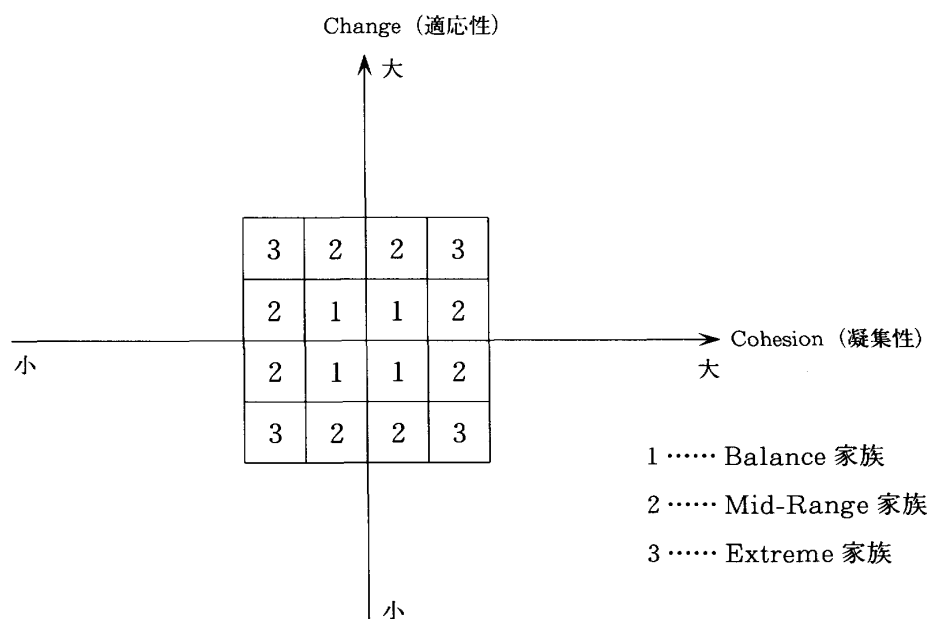


Fig 2 FACES の円環モデル (Olson, D. H. et al, 1985)

目的と方法

- (1) 目的 中学生に青年期の自我発達上の危機状態尺度、バウム・テスト、FACES-Ⅲを実施し、青年期の自我発達上の危機状態尺度の内容的妥当性を検討する。
- (2) 方法
- 対象 長崎県の公立中学校1年生31名（男子16名、女子15名）、2年生30名（男子16名、女子14名）、3年生29名（男子12名、女子17名） 計90名
- 手続き 長尾（1989）の「青年期の自我発達上の危機状態尺度」を実施する。この尺度は、26項目からなる青年期の一般的心性に関連した問題内省水準（略してA水準）と24項目からなる不適応状態に関連した問題自覚水準（略してB水準）の2つで構成されている。前者と後者はそれぞれ7つの下位項目尺度からなっている。また、得点が高いほど危機状態に陥っているととらえるようになってきている。その教示は、「あなたの今の状態をとらえて次の質問に答えてください」とした。バウム・テストは、規定のA4版画用紙と4Bの鉛筆を使用し、「実のなる木を1本描いてください」という教示のもとに行う。FACES-Ⅲは、「凝集性」項目の10項目と「適応性」項目の10項目で構成されている。その教示は「あなたの今の家族の特徴をとらえて次の質問に答えてください」とした。
- (3) 実施期日 中学校の各クラスごとに1992年6月に青年期の自我発達上の危機状態尺度、バウム・テスト、FACES-Ⅲの順で一斉に実施した。
- (4) 評定方法 青年期の自我発達上の危機状態尺度のA水準は26点から130点の得点幅、B水準は24点から72点の得点幅になっており、それぞれ得点を評定した。バウム・テストはFig 1のa値とb値を求め、結果の全体的印象評定に関しては、Table 1に示す印象評定項目を設定してそれぞれ1点から5点までの5件法で得点化した。またその評定は短期大学の学生3名が評定し、3名の総得点の平均値を評定値とした。またKoch, C. (1952) のバウム・テストの診断理論にもとづき、Table 2に示すチェック項目を作成し、結果を見て項目ごとの有無のチェックを行った。FACES-Ⅲの評定は、「いつもそうである」の5点から「決してそんなことはない」の1点までの5件法で得点化し、「凝集性」項目と「適応性」項目のそれぞれ10点から50点までの得点幅である。

Table 1 バウム・テストの印象評定項目

	5	4	3	2	1	
(1) まとまっている						バラバラな
(2) 筆圧の強い						筆圧の弱い
(3) 具体的な						抽象的な
(4) 現実感のある						現実感のない
* (5) さめた感情の						感情のこもった
(6) 複雑な						単純な
(7) 左右対称の						左右バラバラの
(8) 積極的な						消極的な
(9) 動きを感じる						静かな感じ
(10) ていねいな						雑な
* (11) かたいイメージ						柔軟なイメージ
(12) 明るいイメージ						暗いイメージ
(13) のびのびした						萎縮した
(14) 大胆な						憶病な

*印は、逆転項目

Table 2 バウム・テストの各部位の評定チェック

-
- (1) 幹下が開いているかどうか
 - (2) 樹冠が円形か円形でないかどうか
 - (3) 枝が描かれているかどうか
 - (4) 枝が一本線で描かれているかどうか
 - (5) 枝と幹がつながっているかどうか
 - (6) 葉が描かれているかどうか
 - (7) 地平に木が立っている感じかどうか
 - (8) 幹、葉、枝にぬりこみや傷が描かれているかどうか
 - (9) 背景として何か描かれているかどうか
-

結果と考察

㊤危機状態の学年差と性差

危機状態尺度の学年別、男女別の平均値は Table 3 のとおりである。Table 3 をもとに危機状態尺度の A 水準得点、B 水準得点、総得点ごとに性差と学年差の 2 要因の分散分析を行ったところ、A 水準得点において性差 ($F=0.59$, n.s) と学年差 ($F=2.08$, n.s) に主効果は認められなかったが、性差と学年差の交互作用に有意な傾向が認められた ($F=3.05$, $P<.10$)。そこで A 水準得点の学年間の平均値の差の t 検定と性差間の平均値の差の t 検定を行ったところ、性差間に有意差は認められなかったが、1 年生と 2 年生との間に有意差が認められた ($t=2.11$, $P<.05$, 2 年生 $>$ 1 年生)。

また B 水準得点の性差と学年差の 2 要因の分散分析の結果では、性差 ($F=0.75$, n.s) も学年差 ($F=0.38$, n.s) も主効果は認められず、性差と学年差の交互作用も認められなかった ($F=2.10$, n.s)。また総得点においては、性差 ($F=0.01$, n.s) と学年差 ($F=1.54$, n.s) に主効果は認められなかったが、性差と学年差の交互作用に有意差が認められた ($F=3.70$, $P<.05$)。

これらの結果から、中学生の自我発達上の危機状態は性差と学年差との交互作用があり、とくに親子関係の葛藤などの青年期の一般的な悩みの自覚は 2 年生女子の場合に高まるものの、不適応状態の自覚は男女や学年に大きな違いがないことが示唆された。

Table 3 自我発達上の危機状態尺度得点の平均値

学年	1 年 生		2 年 生		3 年 生		全 学 年	
	男 子	女 子	男 子	女 子	男 子	女 子	男 子	女 子
A 水準	79.63 (10.52)	77.66 (7.84)	79.50 (13.65)	90.00 (5.88)	81.17 (11.93)	78.88 (15.46)	80.00 (11.85)	81.87 (11.99)
B 水準	45.25 (9.12)	40.53 (9.01)	42.19 (7.29)	46.07 (6.16)	44.08 (10.23)	40.59 (9.62)	43.82 (8.72)	42.24 (8.70)
総得点	124.88 (17.56)	118.20 (13.81)	121.69 (18.77)	136.07 (9.94)	125.25 (16.54)	119.47 (21.29)	123.82 (17.41)	124.11 (17.70)

() 内は標準偏差値

㊦バウム・テスト結果の学年差と性差

バウム・テストの学年別、男女別の a 値、b 値、印象得点の平均値は Table 4 のとおりである。Table 4 をもとにバウム・テストの a 値、b 値ごとに性差と学年差の 2 要因の分散分析を行ったところ、a 値において性差の主効果 ($F=1.52$, n.s) や性差と学年差の交互作用 ($F=0.001$, n.s) は認められなかったが、学年差の主効果が認められた ($F=3.84$, $P<.05$)。そこで a 値の学年間の平均値の差の t 検定を行ったところ、1 年生と 3 年生との間に有意差が認められた ($t=2.03$, $df=58$, $P<.05$, 1 年生 $>$ 3 年生)。また b 値の性差と学年差の 2

要因の分散分析の結果では、性差の主効果 ($F=0.01, n.s$)、学年差の主効果 ($F=1.03, n.s$)、性差と学年差の交互作用 ($F=0.59, n.s$) どれも有意差は認められなかった。

これらの結果から、Koch, K. (1949) の樹冠に対する幹の高さの比率は自我発達上の指標となるという見地は本研究の結果から確かめられた。山下 (1982) の a 値の研究結果と比較すると、とくに本研究の結果は中学 1 年生の男女とも大きな値が認められたが、この差については、学校環境や時代的な背景を考慮して今後、検討すべきであろう。

Table 4 バウム・テストの評定平均値

学年	1 年 生		2 年 生		3 年 生		全 学 年	
	男 子	女 子	男 子	女 子	男 子	女 子	男 子	女 子
a 値	10.62 (7.91)	9.54 (5.71)	7.16 (6.55)	5.62 (1.79)	8.01 (4.74)	6.50 (3.47)	8.65 (6.71)	7.22 (4.26)
b 値	9.97 (2.99)	10.21 (3.45)	10.32 (1.88)	10.64 (1.87)	11.60 (2.97)	10.64 (2.55)	10.54 (2.44)	10.50 (2.65)
印象得点	45.06 (9.06)	46.27 (8.35)	42.69 (11.75)	40.57 (7.36)	45.67 (10.37)	44.12 (11.94)	44.36 (10.29)	43.74 (9.66)

() 内は標準偏差値

◎危機状態得点とバウム・テスト結果の関係

危機状態得点とバウム・テスト結果の関係をとらえるために危機状態尺度の A 水準得点、B 水準得点、総得点とバウム・テスト結果の a 値、b 値、印象得点とのそれぞれの相関値を算出した。その結果、どの場合においても有意な相関は認められなかった。そこで各学年ごとに同様な相関値を算出し、Table 5 に示した。Table 5 から、中学 3 年生時の場合において、危機状態総得点と a 値との間に正の相関が認められた ($r=.39, P<.05$)。そこで中学 3 年生の危機状態総得点の平均値より高い群と平均値より低い群の 2 群に分けて、2 群間の a 値の平均値の t 検定を行ったところ、高得点群のほうが低得点群よりも a 値が高いことが認められた ($t=2.21, df=27, P<.05$)。

このことから、中学 3 年時ともなると自己内省力が発達し、質問紙法による自己のあり方の報告と投影法であるバウム・テストの結果とがほぼ一致し、青年期の自我発達上の危機状

Table 5 学年別にみた自我発達上の危機状態総得点とバウム・テスト評定値の相関

学 年	1 年 生			2 年 生			3 年 生			
	バウム・テスト 危機状態尺度	a 値	b 値	印象 得点	a 値	b 値	印象 得点	a 値	b 値	印象 得点
危機状態総得点		.02	.04	.12	.24	-.11	-.29	.39 *	-.11	.28

* ... $P<.05$

態尺度の内容的妥当性が高まることがとらえられた。

さらにTable 6 に危機状態尺度のA水準の各下位項目得点、B水準の各下位項目得点とバウム・テストのa値、b値、印象得点とのそれぞれの相関値を示した。Table 6 から「閉じ込めり」得点とのa値は正の相関があることがわかる。このことから、中学生の閉じ込めり反応は自我の未熟さと関連していることがとらえられる。また、印象得点と「決断力欠如」得点は負の相関、印象得点と「緊張とその状況の回避」得点は正の相関があることがわかる。このことから、中学生時の進路の迷いや行動の葛藤がある者は、バウム・テストでは筆圧の弱い、動きのない表現が示される一方、緊張感の高まりがある者は、バウム・テストでは筆圧の強い、動きを感じる大胆な表現が示されることがとらえられた。

また、危機状態得点とバウム・テストに描かれた各部位の表現との関係をとらえるために危機状態尺度のA水準得点、B水準得点、総得点のそれぞれの学年別、男女別の平均値を軸にして、その平均値より高い者を高得点群、平均値より低い者を低得点群に2分し、Table 2 に示した評定チェックをもとにその表現の有無を確認し、これらの有無は危機状態の高得点と低得点の両群間に差があるかどうかの χ^2 検定を行った。その結果、Table 2 の(3)枝が描かれているかどうかのチェックにおいて、危機状態尺度の総得点の低得点群の方が高得点群より、また危機状態尺度のA水準得点の低得点群の方が高得点群より枝が描かれる有意な傾向が認められた(総得点： $\chi^2=3.76$, $df=1$, $P<.10$, A水準得点： $\chi^2=3.03$, $df=1$, $P<.10$)。その他の評定チェックの有無は危機状態の高得点と低得点の両群間に有意な差や有意な傾向は認められなかった。

このことから、Koch, C. (1952) の枝や幹は自我の構造を象徴的に表現しているという解釈を参考にすると危機状態尺度で低得点の中学生は、ある程度自我が発達しているととらえられ、その内容がバウム・テストにおいて枝を描く表現で示されていると推察できる。

Table 6 自我発達上の危機状態下位項目得点とバウム・テスト評定値の相関

危機状態 バウム・テスト	A 水 準							B 水 準						
	決断力 欠如	同一性 拡散	自己 収縮	自己開 示対象 の欠如	実行 力 欠如	親とのア ンビバレ ント感情	親からの 独立と依 存のア ンビバレン ス	緊張と その 状況の 回避	精神 衰弱	身体 的 痛み	希な体験 や精神・ 身体的 反 応	閉じ こもり	身体 的疲 労感	対人 的過 敏性
a 値	.01	.15	-.02	.03	.06	.08	.06	.09	-.01	-.02	.03	.25*	.13	.07
b 値	.03	-.008	-.05	.10	-.02	-.05	-.08	-.02	-.05	-.03	-.03	-.03	-.11	.003
印象得点	-.22*	.09	-.04	-.06	-.04	.001	.05	.31**	.14	-.09	.12	.06	-.07	-.05

* ... P<.05 ** ... P<.01

Fig 3 は、危機状態尺度の総得点が高得点を示したバウム・テストの代表例であり、Fig 4 は、危機状態尺度の総得点が低得点を示したバウム・テストの代表例である。Fig 3 は、Fig 4 に比べて a 値が高く、樹冠や枝の表現がなく閑寂な印象を受ける。一方、Fig 4 は、Fig 3 に比べて a 値が低く、樹冠や枝の表現もあり、まとまっていて落ち着いた印象を受ける。



Fig 3 危機状態尺度の高得点のバウム・テスト例

中学3年生 男子	
自我発達上の危機状態尺度	
A水準	95点
B水準	52点
総得点	147点
バウム・テスト	
a 値	19.3
b 値	15.0

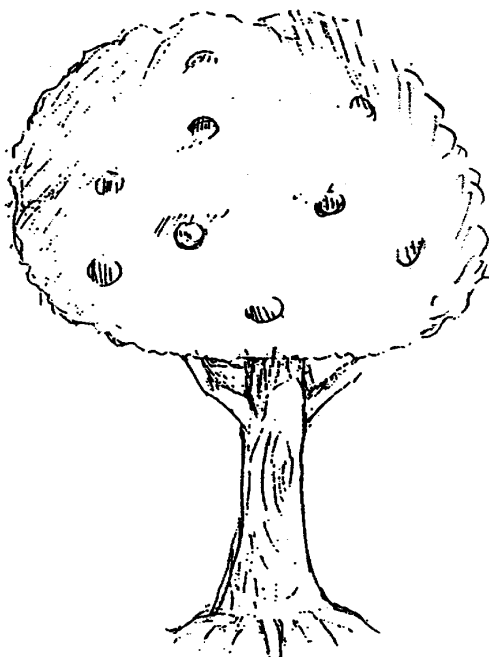


Fig 4 危機状態尺度の低得点のバウム・テスト例

中学1年生 女子	
自我発達上の危機状態尺度	
A水準	79点
B水準	28点
総得点	107点
バウム・テスト	
a 値	7.3
b 値	9.1

④ FACES-Ⅲでとらえた家族関係の学年差と性差

Table 7 は、FACES-Ⅲ得点の学年別、男女別の平均値である。Table 7 の凝集性得点、適応性得点、総得点ごとに性差と学年差の2要因の分散分析を行ったところ、凝集性得点において性差の主効果 ($F=0.75, n.s$) や性差と学年差の交互作用 ($F=0.81, n.s$) は認められなかったが、学年差 ($F=5.10, P<.01$) の主効果が認められた。そこで学年間の平均値の差のt検定を行ったところ、1年生と2年生との間に ($t=1.95, df=59, P<.05, 1年生>2年生$)、2年生と3年生との間に ($t=3.06, df=57, P<.01, 3年生>2年生$) それぞれ有意差が認められた。

また適応性得点において性差の主効果 ($F=0.08, n.s$) や性差と学年差の交互作用 ($F=1.04, n.s$) は認められなかったが、学年差の主効果が認められた ($F=3.08, P<.10$)。そこで学年間の平均値の差のt検定を行ったところ、1年生と3年生との間に ($t=2.47, df=58, P<.05, 3年生>1年生$)、2年生と3年生との間に ($t=2.09, df=57, P<.05, 3年生>2年生$) それぞれ有意差が認められた。

さらに総得点において性差の主効果 ($F=0.43, n.s$) や性差と学年差の交互作用 ($F=0.72, n.s$) は認められなかったが、学年差の主効果が認められた ($F=4.79, P<.05$)。そこで学年間の平均値の差のt検定を行ったところ、2年生と3年生との間に ($t=2.87, df=57, P<.01, 3年生>2年生$)、1年生と3年生との間に ($t=2.07, df=58, P<.05, 3年生>1年生$) それぞれ有意差が認められた。

これらの結果から、中学生の場合には家族関係をとらえるあり方に性差がないことが明らかにされた。また、3年生になると1、2年生時に比較して、家族の問題対処能力の柔軟性が生じることや2年生になると自立性が高まることから家族のまとまりの程度も1年生時に比べて弱まり、再度、受験期を迎える3年生時になると家族のまとまりの程度が高まること示唆された。

Table 7 FACES-Ⅲの平均値

学年	1年生		2年生		3年生		全学年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
凝集性得点	27.69 (7.44)	27.93 (9.22)	24.00 (10.85)	22.43 (9.07)	27.67 (8.63)	32.53 (7.39)	26.34 (9.09)	27.96 (9.33)
適応性得点	20.31 (6.38)	23.27 (5.64)	22.44 (12.09)	19.29 (8.85)	25.75 (6.74)	25.94 (6.99)	22.57 (9.03)	23.04 (7.58)
総得点	48.00 (11.93)	51.20 (12.95)	46.44 (20.52)	41.71 (16.82)	53.42 (13.16)	58.47 (13.12)	48.91 (15.78)	51.00 (15.59)

() 内は標準偏差値

◎危機状態得点と FACES-Ⅲ得点との関係

危機状態と家族関係のあり方との関係をとらえるために危機状態尺度のA水準得点、B水準得点、総得点とFACES-Ⅲの凝集性得点、適応性得点、総得点との相関値をそれぞれ算出した。その結果、危機状態尺度の総得点とFACES-Ⅲの総得点とに有意な負の相関が認められた ($r = -.21, P < .05$)。また、各学年ごとに同様な相関値を算出した結果、中学3年生時においては、危機状態尺度の総得点とFACES-Ⅲの総得点とに負の相関が認められた ($r = -.45, P < .01$)。

このことから、中学生の自我発達上の危機状態は、その家族の凝集性や適応性の程度が低ければ低いほど高いという関係が明らかにされた。とくに中学3年生時においては、危機状態と家族の関係のあり方とは密な関連があることがとらえられた。この結果を臨床的にとらえると中学3年生の自我発達上の危機状態にいるクライアントに対しては、その家族の適切な凝集性や適切な適応性をも考慮して関わっていく必要があることが示唆された。

Table 8 は、危機状態尺度のA水準、B水準それぞれの下位項目得点とFACES-Ⅲの凝集性得点、適応性得点との相関値を算出した結果である。Table 8 から家族の凝集性が低いととらえている中学生ほど自己収縮、自己開示対象の欠如、実行力欠如、親とのアンビバレント感情、緊張とその状況の回避のそれぞれの得点が高いことがわかる。また、家族の適応性が低いととらえている中学生ほど自己開示対象の欠如得点が高いことがわかる。Reinherz, H. Z. ら (1989) の同じFACES-Ⅲを用いた研究結果から抑うつ程度の強い中学生はその家族の凝集性が弱いことが明らかにされているが、本研究の結果からも同様な結果が示された。また、Bernstein, G. A. ら (1990) の登校拒否の中学生のいる家族の研究から家族の適応性が弱いことが示されているが、臨床的にとらえて登校拒否の中学生は友人や先輩に心を開いて話さない傾向があり、健常中学生を対象とした本研究の結果からも自己開示対象の欠如は、家族の適応性と関連があることが明らかにされた。

Table 8 自我発達上の危機状態下位項目得点とFACES-Ⅲ得点の相関

危機状態 FACES-Ⅲ	A 水 準							B 水 準						
	決断力 欠如	同一性 拡散	自己 収縮	自己開 示対象 の欠如	実行 力 欠如	親とのア ンビバレ ント感情	親からの 独立と依 存のア ンビバ ランス	緊張と その状 況の回 避	精神 衰弱	身体 的 痛み	希な体 験や精 神・身 体的 反応	閉じ こもり	身体 的疲 労感	対人 的過 敏性
凝集性	-.16	-.02	-.22 **	-.25 **	-.32 ***	-.19 *	-.04	-.24 **	-.04	-.18	-.14	-.07	-.06	-.07
適応性	-.11	.18	-.06	-.21 **	-.16	-.06	.06	-.08	.05	-.06	-.12	.01	.10	.04

* ... $P < .10$

** ... $P < .05$

*** ... $P < .01$

Fig 5 と Fig 6 は、男女別の FACES-Ⅲの凝集性得点と適応性得点の平均値と標準偏差値を軸に Olson, D. H. ら (1985) の円環モデルに則り、本研究結果をプロットしたものである。男女別の危機状態尺度総得点の平均値をもとに平均値より高い者を高得点群、平均値より低い者を低得点群に分け、Fig 2 に示す家族の分類の割り合いを算出した。その結果、男子の場合、高得点群は Balance 家族が26.1%、Mid-Range 家族が7.1%、Extreme 家族が16.6%、低得点群は Balance 家族が23.8%、Mid-Range 家族が19.0%、Extreme 家族が7.1%であり、女子の場合、高得点群は Balance 家族が26.1%、Mid-Range 家族が11.8%、Extreme 家族が7.1%、低得点群は Balance 家族が26.1%、Mid-Range 家族が19.0%、Extreme 家族が9.5%であった。

このことから、中学生の場合、青年期の自我発達上の危機状態は、FACES-Ⅲでとらえた家族関係のあり方の分類とは大きな関連がないことがとらえられた。この原因について、米国の家族をモデルとした FACES-Ⅲのもつ文化差が考えられる。また、危機状態尺度の高得点群と低得点群とに家族関係のあり方に大差がない原因について、本研究の FACES-Ⅲの被験者が中学生であった点があげられる。本来、FACES-Ⅲの被験者は、成人以上の者に限られているが、本研究では中学生自身に自分の家族についてを評定してもらった。したがって、中学生の自我発達を考慮すると果たして自分の家族について客観的な評定が可能かどうかという問題がある。この

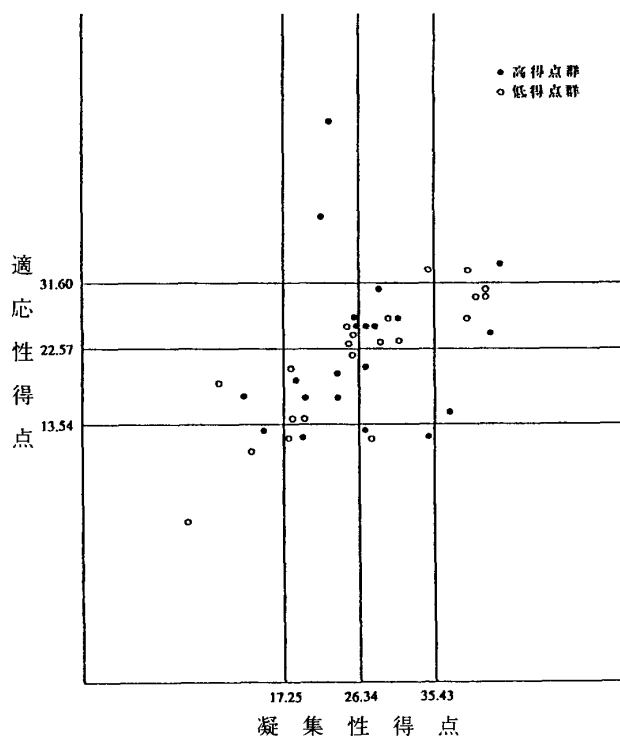


Fig 5 FACES-Ⅲの得点分布図 (男子)

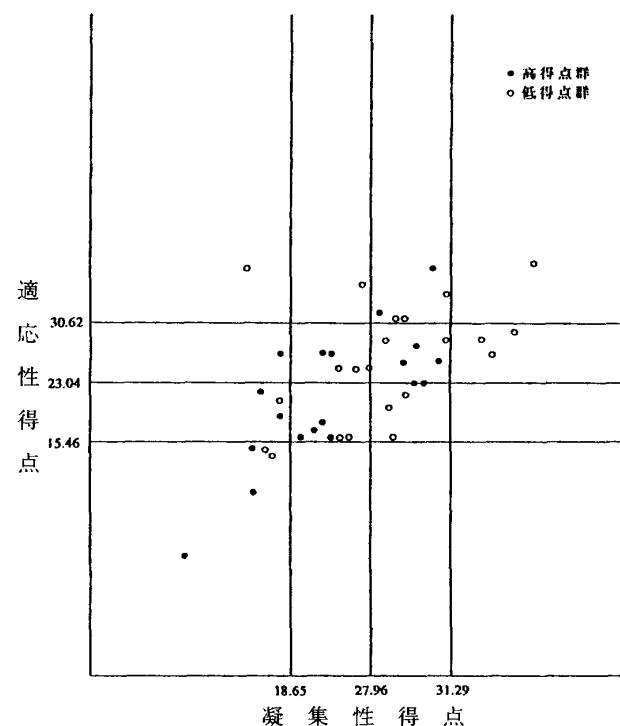


Fig 6 FACES-Ⅲの得点分布図 (女子)

点に関して、Achenbach, T. M. ら (1987) の研究では青年とその親を対象とした調査の場合、結果のズレが生じないことをあげているが、逆に Hill, D. J. ら (1985) の研究では双方による調査結果のズレが生じやすいことが指摘されている。FACES-Ⅲによる調査に関して、その対象を青年にするかその親にするかは残された課題と思われる。

①追加資料

青年期の自我発達上の危機状態尺度の内容的妥当性をさらに検討するために女子大学生を対象に青年期の自我発達上の危機状態尺度とロールシャハテストを実施した。

方 法

対 象 尾崎・長尾 (1992) の大学生を対象とした青年期の自我発達上の危機状態尺度の総得点結果の高得点の女子大学生1年生1名と低得点の女子大学生1名

手続き 女子大学生の自我発達上の危機状態尺度の総得点平均値より高い者を1名、平均値より低い者を1名選出し、大学の学生相談室において個別にロールシャハテストを実施する。

実施期日 1992年12月

その結果を整理したものが Table 9 である。Table 9 から、危機状態高得点事例のほうが低得点事例よりも「決断力欠如」、「同一性拡散」、「自己収縮」、「自己開示対象の欠如」、「実行力欠如」、「精神衰弱」、「閉じ込もり」、「身体的疲労感」の各下位項目得点が高いことがわかる。また、ロールシャハテストの形式分析の結果から、危機状態高得点事例のほうが低得点事例よりも平均反応時間が長く、全体反応、P 反応 (popular response) の出現率や形態水準も低く、部分反応や動物反応の出現率が高いことがわかる。また、ロールシャハテストの内容分析の結果から、危機状態高得点事例のほうが低得点事例よりも衝動のコントロール能力に欠け、緊張感を強くもち、自我の統合力が乏しいことがとらえられた。

これらのロールシャハテストの結果の比較からも青年期の自我発達上の危機状態尺度の内容的妥当性は確認できた。

Table 9 危機状態尺度高得点事例と低得点事例のロールシャハテスト比較

危機状態下位項目	高得点事例 (平均値)	低得点事例 (平均値)
決 断 力 欠 如	3.6	2.8
同 一 性 拡 散	3.5	2.6
自 己 収 縮	4.0	2.2
自 己 開 示 対 象 の 欠 如	4.0	3.5
実 行 力 欠 如	4.3	2.0
親とのアンビバレント感情	3.3	3.7
親からの独立と依存のアンビバレンス	4.0	4.0
緊張とその状況の回避	1.3	1.0
精 神 衰 弱	3.0	1.5
身 体 的 痛 み	1.0	1.0
希な体験や精神・身体的反応	1.0	1.0
閉 じ こ も り	2.0	1.3
身 体 的 疲 労 感	2.6	1.3
対 人 的 過 敏 性	1.5	1.0
ロールシャハテストのおもなスコアリング	高 得 点 事 例	低 得 点 事 例
Total R	38	23
Ave. R	2' 23"	1' 38"
W %	18.4%	39.0%
FM : M	6 : 7	1 : 3
FC : CF + C	2.5 : 3.5	2.5 : 1.5
F %	37.0%	52.0%
F + %	57.0%	92.0%
W : D	7 : 16	9 : 11
Dd %	37.0%	9.0%
P	2	6
A %	55.0%	35.0%
H %	15.8%	26.0%
Content Range	10	8
所 見	全体よりも部分にこだわりのみで、未熟で衝動をコントロールする能力に欠ける。P反応が少なく、緊張感があり、内的なまとまりに欠ける。	全体をとらえる能力や衝動をコントロールする能力もある。P反応が多くみられ、内的なまとまりがとらえられる。

まとめと今後の課題

青年期の自我発達上の危機状態尺度の内容的妥当性を検討するために、中学生男子44名と中学生女子46名に対し青年期の自我発達上の危機状態尺度、バウム・テスト、およびOlson, D. H.らの作成したFACES-Ⅲを実施した。そのおもな結果は、次のとおりに要約された。

- 1) 青年期の自我発達上の危機状態尺度総得点において、学年と性差の交互作用が認められた。とくにA水準（青年期の一般的心性に関する水準）では、中学2年生は中学1年生よりも高い得点を示した。
- 2) バウム・テストの樹冠に対する幹の高さの比率に学年差が認められ、とくに中学1年生は中学3年生よりも高い値を示した。
- 3) FACES-Ⅲの凝集性得点と適応性得点において学年差が認められた。
- 4) 中学3年生の場合、自我発達上の危機状態総得点とバウム・テストの樹冠に対する幹の高さの比率とは正の相関が示された。また、危機状態総得点の低い者は、バウム・テストで枝を描きやすい傾向が示された。
- 5) 自我発達上の危機状態総得点とFACES-Ⅲ総得点とは負の相関が認められたものの、FACES-Ⅲでとらえた家族関係のあり方の分類と自我発達上の危機状態は関連がないことが示された。また、FACES-Ⅲの各下位項目得点と自我発達上の危機状態尺度の各下位項目得点とで多くの負の相関が認められた。

しかしながら、本研究の結果を一般化して臨床現場で適用していくためには多くの課題がある。そのおもな課題として、

- (1) 調査対象数をにふやしてとらえること
- (2) FACES-Ⅲは、米国家族のあり方を基準としたものであることから、わが国の家族関係のあり方を明らかにして、FACES-Ⅲの標準化を行うこと
- (3) 調査対象を中学生に限らず、高校生や大学生、あるいはその両親までとらえてみることなどがあげられる。

謝 辞

本研究にご協力いただいた諫早市の公立中学校の教員方々、生徒の皆様、および活水女子短期大学の学生の皆様に心より感謝申し上げます。

文 献

- (1) Achenbach, T. M., McConaughy, S. H. & Howell, C. T. 1987 Child/adolescent behavioral and emotional problems. *Psychological Bulletin*, 101, 213-232.
- (2) Bernstein, G. A., Svingen, P. H. & Garfinkel, B. D. 1990 School phobia. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 29, 24-30.
- (3) Hill, J. P., Holmbeck, G. N., Marlow, L., Green, T. M. & Lynch, M. E. 1985 Menarcheal stress and parent-child relations in families of seventh-grade girls. *Journal of Youth and Adolescence*, 14, 301-316.
- (4) Koch, K. 1949 *Der Baumtest*. Bern und Stuttgart, Hans Huber.
- (5) Koch, C. 1952 *The tree test*. Bern und Stuttgart. Hans Huber.
(林勝造・国吉政一・一谷彊 訳 1971 バウムテスト 日本文化科学社)
- (6) Malmquist, C. P. 1965 School phobia. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 4, 293-319.
- (7) 長尾博 1989 青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み. *教育心理学研究*, 37, 71-77.
- (8) 長尾博 1992 青年期の自我発達上の危機状態尺度の併存的妥当性の検討と危機状態の縦断的研究. *カウンセリング研究*, 25, 107-111.
- (9) Olson, D. H., Portner, J. & Lavee, Y. 1985 *Family adaptability and cohesion evaluation scales*. Minnesota. University of Minnesota.
- (10) 尾崎節子・長尾博 1992 大学生の精神的諸問題からみたクラスアワーの意義 その2. *長崎総合科学大学紀要*, 33, 271-280.
- (11) Reinherz, H. Z., Stewart-Berghauer, G., Pakiz, B., Frost, A. K., Moeykens, B. A. & Holmes, W. M. 1989 The relationship of early risk and current mediators of depressive symptomatology in adolescence. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 28, 942-947.
- (12) 貞木隆志・榎野潤・岡田弘司 1992 家族機能と精神的健康. *心理臨床学研究*, 10, 74-79.
- (13) Scott, W. A. & Scott, R. 1991 Family relationships and children's personality. *British Journal of Social Psychology*, 30, 1-20.
- (14) 山下真理子 1982 バウムテストの発達の研究. *教育心理学研究*, 30, 287-292.